

創刊二二〇〇年記念座談会 PART II

——二〇〇〇年以降の「心の花」を読む——

2016.7.24 於・佐佐木邸

佐佐木幸綱・十字都宮とよ・奥田亡羊・墨石剛仁・齋藤佐知子・
佐佐木朋子・佐佐木頼綱・田中拓也・谷岡亜紀・森屋めぐみ

☆連載について——「歌の本」「古歌を慕う」

「ちいさな言葉」「思い出す人々」「言葉の位相」「コンゴ便り」

幸綱 「心の花」創刊百二十年記念座談会の第二回です。今日は二〇〇〇年以後、百年記念号以後の「心の花」について話してもらいます。

最初は連載から。どういう連載があった

か。担当は頼綱です。

頼綱 二〇〇〇年から二〇一五年まで、全部で六つの連載がありました。

まず一九九九年から始まった小紋潤さんの「歌の本」。第一回は石樽千亦の『潮鳴』でした。毎回、装丁家でもある小紋さんらしいブックレビューがされています。この連載が始まった頃、僕はまだ編集に携わってなかったのですが、どういった経緯で始まったのか、皆さんに伺えたらと思っています

す。

森朝男さんの「古歌を慕う」は二〇〇一年四月から始まりました。二〇〇九年、百回を超えたあたりから書籍化の話が持ち上がり、二〇一一年八月にながらみ書房から『古歌に尋ねよ』として刊行されました。翌二〇一二年には第二十回ながらみ書房出版賞もとっています。

俵万智さんの「ちいさな言葉」は二〇〇六年開始。俵さんがご長男の面白い言葉をい